氏　　名	千島　雄太
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	博甲第　7805　号
学位授与年月	平成　28 年　3 月　25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	青年期における自己変容に対する志向性の個人差と発達的変化

主　　査	筑波大学教授	博士（心理学）	佐藤　有耕
副　　査	筑波大学教授	文学博士	松井　　豊
副　　査	筑波大学教授	教育学博士	櫻井　茂男
副　　査	中央大学教授	博士（教育学）	都筑　　学

論文の内容の要旨

（**目的**）　本論文では、自己を強く意識し、自己を振り返ることの多い青年期において、自己の否定性への注目が高まることから生じる“今の自分を変えたい”・“変わりたい”という気持ちに着目した。青年期には、否定的な自己が意識されやすく、同時にその否定性を主体的に克服しようとする志向性が強まる。本論文ではこのような主体的に現在の自己の変容を志す気持ちを“自己変容に対する志向性（intention for self-change)”と呼び、青年期が主体的な人格形成期であるという観点から、この発達的特徴について実証的に検討した。

第Ⅰ部の理論的検討において先行研究を検討した結果、第一に、自己変容という現象に含まれる多様性が指摘され、本論文ではその中でも主体的な自己変容を取り上げることを論じた。第二に、主体的な自己変容に関連する先行研究を概観し、いずれの研究においても、現在の自己を変え、成長していこうとする主体性が議論されてはいるが、自己変容を志す気持ちそのものに焦点化した研究は不足していることを指摘した。第三に、自己変容を志す気持ち、すなわち自己変容に対する志向性について人格形成という観点から検討する上では、個人差と発達的変化の両方に着目する必要があること、アイデンティティや時間的展望の発達との関連を検討する必要があること、自己変容に対する志向性の関連要因についても検討する必要があることを指摘した。以上のことを踏まえて本論文では、青年期における自己変容に対する志向性に関して、個人差と発達的変化に着目しながら、その特徴を明らかにすることを目的とした。

第Ⅱ部の実証的検討においては、本論文において青年期を対象とすることの前提を示す研究として、青年期から老年期までを含めて、生涯発達的観点から自己変容に関連する諸変数の年齢的傾向を明らかにする(研究 1)。この検討によって青年期に着目することの意義を確認した上で、第一に自己変容に対

する志向性を生起させる心理的要因、第二に自己変容に対する志向性に寄与する理想自己の役割、第三に自己変容に対する志向性に伴う意識という三点からの検討を行う。第一の自己変容に対する志向性を生起させる心理的要因に関する研究では、自己変容に対する志向性の諸側面について分析した上で、それらの発達的変化について明らかにし、アイデンティティおよび自尊感情との関連についても検討を加える(研究 2,3,4,5)。第二の自己変容に対する志向性に寄与する理想自己の役割に関する研究では、青年が自己変容を志向する際に理想自己を伴った変容を志向しているかどうかに着目し、理想自己を伴う自己変容に対する志向性の発達的変化の検討を行うことで、理想自己を伴うことがアイデンティティ形成などの心理的発達にもたらす寄与について明らかにする(研究 6,7,8)。第三の自己変容に対する志向性に伴う意識に関する研究では、自分が変わることへの意識を自己変容の捉え方として概念化し、自己変容の捉え方の違いによる差異を明らかにする(研究 9,10)。さらに、自己変容の捉え方のうちの中核的な概念である自己変容の予期に伴う葛藤に着目し、自己変容すること・しないことに関連する葛藤が、青年の心理的発達にどのように寄与しているかを明らかにする(研究 11,12)。

そして第Ⅲ部の総括において、得られた研究知見を個人差と発達的変化の観点から整理し、自己変容に対する志向性の発達的変化と発達的意義について論じ、得られた知見に基づく教育的・臨床的支援のあり方について提言した。

（**対象と方法**） 第Ⅱ部の実証的検討において、青年期を中心とした調査対象者に対して、計 12 回の質問紙調査を行い、得られたデータは多変量解析等を用いて分析した。研究 1 では、15 歳から 69 歳まで平均年齢 33.66 歳の 997 名を対象とした web 調査を行った。研究 2 では、平均年齢 19.30 歳の大学生 71 名を対象とした記述式の質問紙調査を行った。研究 3 では、平均年齢 19.32 歳の大学生 304 名を対象とした評定式の質問紙調査を行った。研究 4 では、平均年齢 20.28 歳の大学生 264 名を対象とした評定式の質問紙調査を行った。研究 5 では、平均年齢 13.47 歳の中学生 353 名、平均年齢 15.92 歳の高校生 375 名、平均年齢 20.35 歳の大学生 400 名、合計 1128 名を対象とした評定式の質問紙調査を行った。研究 6 では、平均年齢 19.53 歳の大学生 393 名を対象とした評定式の質問紙調査を行った。研究 7 では、平均年齢19.92歳の大学生230名を対象とした評定式の質問紙調査を行った。研究8では、平均年齢13.24歳の中学生 433 名、平均年齢 16.32 歳の高校生 597 名、平均年齢 19.53 歳の大学生 393 名、合計 1423 名を対象とした評定式の質問紙調査を行った。研究 9 では、平均年齢 19.30 歳の大学生 71 名を対象とした記述式の質問紙調査を行った。研究 10 では、平均年齢 20.35 歳の大学生 400 名を対象とした評定式の質問紙調査を行った。研究 11 では、平均年齢 18.66 歳の大学生 91 名を対象とした記述式の質問紙調査を行った。研究 12 では、平均年齢 13.72 歳の中学生 525 名、平均年齢 16.37 歳の高校生 284 名、平均年齢 20.32 歳の大学生・専門学校生 353 名、合計 1162 名を対象とした評定式の質問紙調査を行った。

（**結果**） 最初に、自己変容に関連する諸変数の年齢的傾向を検討した結果、自己変容に対する志向性や関心は青年期をピークとして年齢が上がるにつれて低くなる一方で、自尊感情は年齢が上がるにつれて高くなることが示され、自己変容に対する志向性について青年期に注目することの重要性が確認された(研究 1)。この知見を受けて、第一の自己変容に対する志向性を生起させる心理的要因に関する研究を行った。自己変容に対する志向性は 9 側面が抽出され(研究 1,2)、今の自分を変えたいという気持ちは、全体的に自分自身に対して肯定的な評価をしておらず、自分のあり方を模索しているモラトリアム段階にある大学生で高いことから、自己変容に対する志向性は青年期におけるアイデンティティの模索過程で生じることが示唆された(研究 3,4)。さらに、自己変容に対する志向性の諸側面は、“将来焦点的-過去焦点的”と“空想的-現実的”の 2 軸で整理され、学校段階が上がるにつれて、将来焦点的かつ現実的な方向へと変化することが示された(研究 5)。

第二の自己変容に対する志向性に寄与する理想自己の役割に関する研究では、自己変容に対する志向

性は、理想自己に変わった姿をイメージすることや理想自己への変容のための計画を持つことによって、アイデンティティ形成に寄与することが明らかにされた(研究 6, 7)。また、学校段階ごとの検討によって、中学生では自己変容に対する志向性を持たない者や、変えたい現実自己が思いつかない者の割合が多く、大学生においては変えたい現実自己は明確であるものの目指すべき理想自己が思いつかない者や、理想自己が明確である者の割合が多いことが明らかにされた(研究 8)。

第三の自己変容に対する志向性に伴う意識に関する研究では、自己変容に対する志向性と心理的適応や自己変容の実現との関連を検討した結果、自己変容が困難であると思っており、変わることに不安や葛藤を抱えているほど、自尊感情が低く、変容が実現されていないことが明らかにされた(研究 9, 10)。続いて、さらに変数を精緻化して学校段階ごとに検討した結果、中学生は、自己変容のメリットやデメリットについてあまり意識していない者や、現在の自分を維持することのメリットを意識している者が多く、高校生では、今のままの自分でいることのデメリットを意識しつつ、変わることのデメリットも意識している者が多いことが示された。大学生では、変わることと今のままでいることの両方のメリットを意識している者が多かった。高校生に代表される現状維持と自己変容の両方のデメリットを意識し立ちすくんでいる者たちは、両方のメリットを意識している者たちに比べると、自己変容の実現、自尊感情、内省の得点が低い状態にあることも示された。

（**考察**） 第Ⅲ部の総括においては、自己変容に対する志向性の意義について議論され、自己変容を望む際には、現在の自己のみに注目してそれを否定的に見るのではなく、理想とする自分をイメージして計画的に取り組むとともに、自分の中にある葛藤を理解することが重要であることを論じた。また、変わっていくことでもたらされるメリットだけでなく、今のままの自分でいることにも良い面があることに気付き、受容できるようになることの意義が主張された。続いて発達的変化については、青年期前期（中学生）は、自己変容への関心が薄く、空想的な自己変容を望む段階にあること、青年期中期（高校生）は、自己変容を望む一方で変わることへの葛藤がみられる段階にあること、青年期後期（大学生・専門学校生）は、理想の自分に向かって現実的な自己変容を望む段階にあることが示され、変容を空想する段階から、今の自分の否定性に直面し、そこからの脱却を望む中で、次第に理想の自分に向けて現実的な自己変容を目指す段階へと発達的に変化すると結論した。

審査の結果の要旨

（**批評**） 本論文は、青年期に強く現れる“今の自分を変えたい”・“変わりたい”という主体的に現在の自己の変容を志す気持ちを“自己変容に対する志向性”として概念化し、行動変容のための方法論の構築ではなく、自己変容に対する志向性を生じさせる心理的要因、人格形成に寄与する志向性のあり方、自己変容に対する志向性が持つ発達的意義について明らかにした点が大きな成果と言える。青年心理学研究において，新たな知見を加えた本研究の意義は大きく、自己変容という観点から青年期の人格形成にアプローチしたオリジナリティの高い研究として評価された。

平成 28 年 1 月 27 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。